

東京大学大学院人文社会系研究科  
次世代人文社会学育成プログラムによる海外派遣  
帰国報告

最終報告提出日：2012年3月6日

派遣生氏名： 菊地 重仁  
派遣時所属： ミュンヘン大学歴史学科  
派遣形態： PD

研究課題： 初期中世文書コミュニケーションにおける君主の尊称

#### 派遣先での活動

##### (1) 派遣先の基本情報

受入研究機関： モヌメンタ・ゲルマニアエ・ヒストリカ（ドイツ・ミュンヘン）  
受入研究者： ルドルフ・シーファー教授

##### (2) 派遣期間

2011年3月23日～2012年2月28日（総日数：343日）

#### 主な研究成果

##### (1) 当初の計画の概要

従来の西欧中世史研究で本格的な分析の対象とならなかった国王文書中の尊称を、カロリング朝君主を例に体系的に研究する。尊称のレパートリーとそれが用いられた文書の性格、発行時期などを国王毎に整理しデータベース化し、かつ尊称として用いられた抽象名詞を概念的に整理することにより、政治的レトリックとしての尊称の用法を文脈化することを試みる。同時に国王に宛てられた書簡における尊称の用法も考察の対象とし、宮廷が発信した王権像と宮廷外における王権像をコミュニケーションという観点で比較することで、尊称の用法からプロパガンダ、イメージの受容、王権への期待などの側面を読み取る。

##### (2) 実際に達成された成果

a) カロリング朝国王証書を中心とした刊行史料を蒐集し、尊称レパートリーのデータベース作成を進めながら、ミュンヘンの恵まれた図書館環境を活かし、できる限り広範に研究文献を調査した。その過程でルートヴィヒ敬虔帝（在位814-840）皇帝文書集の刊行が遅れているとの情報を得たため、ここ数世紀のうちに各所で散発的に公刊された翻刻・校訂版を蒐集し、未刊行かつ原本にアクセスできなかった数点を除いた全ての真正文書を調査した。また本研究のテーマについてモヌメンタ常勤の研究者に加え同研究所に短期間滞在していたミュンヘン外の研究者、ミュンヘン大歴史基礎学科（旧・歴史補助学科）の研究者、さらに下記の学会に参加していた研究者たちと意見交換を行なうことができた。

b) 国際中世学会 International Medieval Congress (2011年7月11日～14日、於・イギリス、リーズ大学) において研究成果の一部を「Monarchical representation in Carolingian royal charters: how high the king?」のタイトルで報告した。また同報告に上記ルートヴィヒ敬虔帝皇帝文書の分析結果を加えた同タイトルの論考を論集

『Problems and Possibilities of Early Medieval Diplomatic: charter critique and history from charters』に寄稿した(出版準備中)。

c) 本研究において得られたメディアとしての国王証書に関する知見・分析視角を同じく国王の権威を背景としつつもカロリング期に特徴的な史料群であるいわゆる「カピトゥラリア」の分析に応用することを試み、名古屋大学GCOE「テキスト布置の解釈学的研究と教育」主催の国際研究集会「歴史におけるテキスト布置」(2011年9月1日～2日、於・名古屋大学)において「Carolingian capitularies as texts」と題する報告を行なった(報告集は2012年3月刊行予定)。

### (3) 今後の研究展望

「コミュニケーション」を表題に掲げつつも、派遣期間中の研究は主として王権による王権像「発信」のありかたの分析に留まったため、今後は宮廷外でのイメージの受容、王権への期待といった要素の分析を重点的に進めなくてはならない。写本中の挿絵など文書以外のメディアにおける王権像の分析研究への接続も必要である。さらにはいわゆる Urkundenlandschaftなど、考察に組み入れるべき要素はまだ多く残されているが、引き続き研究を進め、初期中世の政治文化研究および文書形式学双方へのさらなる貢献をめざしたい。